VMware仮想環境のトータルバックアップを効率的に。

仮想マシンへのエージェント導入は不要、運用効率の手軽さと低コストが決め手。

業　　種：放送関連業
会 社 名：北日本放送株式会社
従業員数：127名（2011年3月現在）

課　題

3年前から運用工数の削減を目指してサーバ仮想化を推進。その環境のシステム保護については仮想アプライアンスによる運用を行っていた。ある時、24時間365日稼働が求められる報道システムにサーバダウンが発生。調査してみると、バックアップソフトウェアのスナップショットが削除されないまま累積されてディスク領域を圧迫していることが原因と判明した。しかし、解決策が見つからずバックアップ製品切替が急務となった。

経　緯

求めたのは運用工数が少なく、リストアが簡易なイメージバックアップ製品。興味を持ったのが、Arcserve D2Dおよび 仮想環境専用オプションの Central Host-Based VM Backup だった。エージェントレスで仮想サーバを包括的にバックアップ運用でき、マシン単位からDB単位に至るまで様々な単位でリストアできる点も魅力と感じた。また、初期導入コストを含め、トータルコストも低減できることから採用を決定した。

導　入

現在、4台のVMware ESXサーバが稼働しており、この環境をすべてCA ARCserve D2DおよびArcserve Central Host-Based VM Backupでバックアップしている。
2012年3月の本番導入以降、バックアップに関してトラブルは発生しておらず、運用についてもほとんど工数はかかっていない。また、ファイル単位でリストアできる機能は、ユーザの操作ミスによるファイル削除を救済する機能として重宝されている。

効　果

仮想化は社内でシステム業務を完結したい企業に向いており、この仮想環境への移行を後押ししたのがArcserve D2Dによるイメージバックアップであると同社では評価。簡単で低コストであるゆえに対象サーバを絞らずに導入でき、これによりシステム保護レベルが向上した。また、他に業務を抱える少数精鋭の情報システム担当者にとって、バックアップの確実さ、運用工数を低減できることが安心をもたらしている。

arcserve®

北日本放送株式会社
営業本部 編成業務局
編成業務部
寺西 徹 氏

北日本放送では、3年前よりサーバ仮想化の取り組みを開始した。これらの環境 では仮想アプライアンスを採用したが、ある時、ミッションクリティカルな報道システムでバックアップソフトウェアの不具合に起因したサーバダウンが発生。問題を解決しきれなかったため、CA ARCserve D2Dおよびそのオプション製品 Arcserve Central Host-Based VM Backupに切り替えた。導入により、バックアップに関するトラブルは解消、手間のかからない運用が実現した。また、操作ミスによるファイル削除を救済するなどユーザビリティも大きく向上している。

課題・経緯

放送の未来を先取りする富山のテレビ・ラジオ兼営放送局

北日本放送株式会社は、日本テレビ系列のテレビ、ラジオを兼営する富山県の放送局だ。2012年で開局60周年を迎えた。2004年10月、地方局として最初に地上デジタルテレビ放送を開始、高画質・多チャンネル時代の到来をいち早く富山県民にもたらした。近年は、放送に加えて、インターネットサイト「KNBWEB」、携帯サイト「KNBモバイル」、通販サイト「逸品チャンネルDeSiCaとやま」を積極的に展開し、リアルタイムな情報発信に注力している。

運用工数の削減を目指してシステム仮想化を推進

北日本放送では、情報システムに関する開発や運用管理業務を、編成業務部に所属するわずか2名の社員でカバーしている。近年は放送と通信の融合が進む中、情報システム関連業務は増加の一途をたどっている。しかも機敏な対応が必要であることから、できるだけ社内で業務を完結するよう経営陣から求められていた。

その中で浮上したテーマの1つが仮想環境の導入だった。3年前、同社には更新時期を迎えたサーバが数多く存在した。北日本放送株式会社 営業本部 編成業務局 編成業務部 寺西 徹氏は、この新しい技術潮流である仮想環境を導入することで、バックアップを含めたサーバの運用工数を大きく削減できると考え、更新期限が迫ったサーバを1台ずつ仮想環境へ置き換えていくことにした。

実際に利用してみると、社内から寄せられるサーバ増設要望に応えたり、テスト環境を立てたりと、柔軟な動きが可能になり、利便性を享受することができた。また、バックアップについても、物理サーバではテープバックアップであったため、テープの入れ替え作業など運用工数が多いと感じていたうえ、予算の関係からバックアップを取っていない危険なサーバもあった。しかし、仮想環境ではディスクバックアップを行うことにしたので、仮想化したすべてのサーバをバックアップすることができた。システム保護のレベルが上げられることもあって、サーバの更新時期にかかわらず、可能な範囲で仮想化を前倒しで進めていった。

その当時から、仮想環境のバックアップにはシステムインテグレータから紹介された異なる製品を利用していたのだが、ある時事件に見舞われた。24時間365日稼働を求められる報道システムで、ディスク容量エラーによるシステムダウンが発生したのだ。調べてみると、バックアップを取る際に一時的に作成されるスナップショットが、なぜかバックアップを完了しても消えなくなり、それがバックアップを取るたびに蓄積してディスク領域を占有してしまったのである。システム保護のために導入した製品が、重要なシステムの可用性を下げるようでは…と頭を抱えていた。

導入

バックアップソフトの不具合により、Arcserve製品へ切り替え

そんな中で思い出したのが、以前紹介されたCA ARCserve D2Dとオプション製品 Arcserve Central Host-Based VM Backupだった。これは、仮想マシンにバックアップエージェントを導入することなく、丸ごとイメージ

バックアップを実行でき、仮想環境のバックアップ運用工数を 劇的に簡素化する製品。寺西氏は実際にトライアル版を入手し、数台の仮想化サーバで2週間試用。自らインストールし、スケジュール機能、圧縮具合、リストア方法などを中心に機能をみながら検証を進めた。ここで手軽さや有用性を実感できたため、導入を決断したという。

「まず、仮想マシン側にエージェントを導入しなくても、バックアップできるというのが大きな魅力でした。Arcserve D2Dサーバ側で仮想化サーバが自動的に検出され、対象マシンをいつ、どこにバックアップするのかをGUI画面で設定するだけ。すぐバックアップに入ってくれるので、万が一担当者が私1人だけという環境でも工数をかけずに運用を行えると確信できました。

また、取ったバックアップから、マシン単位だけでなくファイル単位、データベース単位でリストアできる点、設定したスケジュール通りに動く点も高く評価しました。今まではこれができなかったのですが、ファイル単位で戻せればユーザからの要望にも応えやすいし、当社の構想通り、バックアップスケジュールを立てられると思いました」と、寺西氏はArcserve D2DおよびArcserve Central Host-Based VM Backupの採用理由をこのように語っている。そして、機能、性能面ばかりではなくCentral Host-Based VM BackupはESXサーバ単位のライセンスのため、初期費用、ランニングコストを含めたArcserve D2Dのトータルコストの低さも決め手となった要因の1つだった。

効果

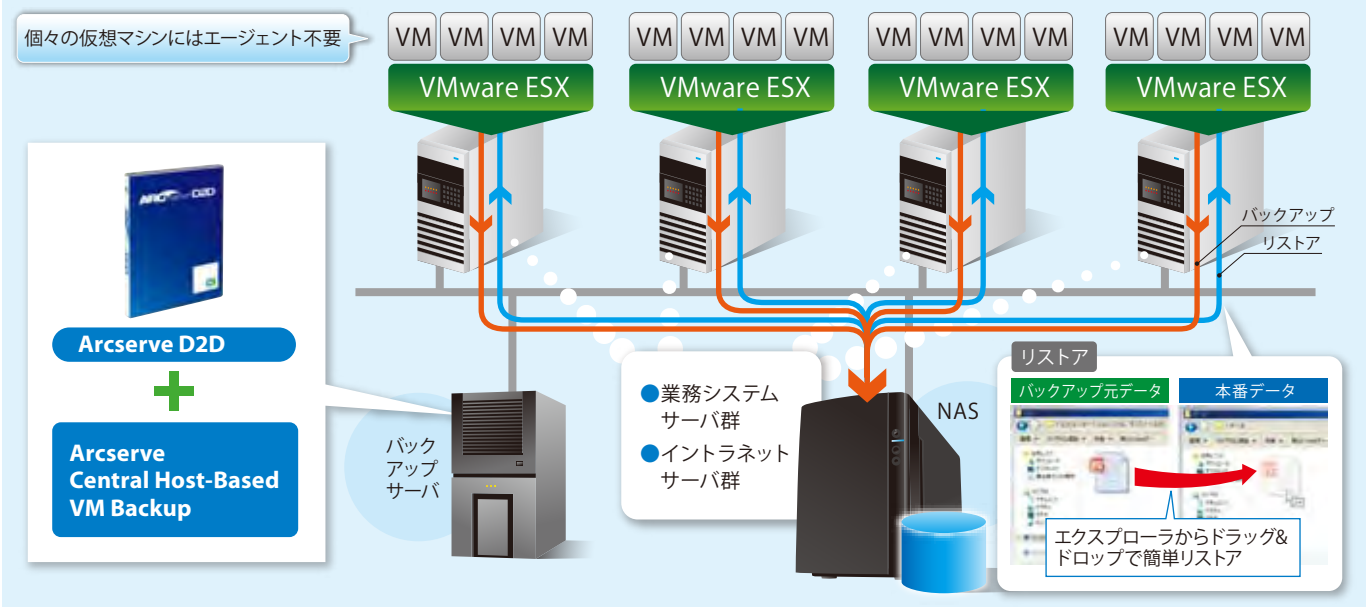
トラブルは解消、手間のかからないバックアップ運用を実現

現在、同社では4台のVMware ESXサーバが稼働しており、この環境をすべてArcserve D2DおよびArcserve D2D Central Host-Based VM Backupでバックアップを行っている。2012年3月の本番導入以降、バックアップに関してトラブルは発生していない。また、その運用についても、管理画面で成否をチェックする程度でほとんど工数はかかっていないそうだ。それは他にカバーすべき本業を持つ寺西氏によって、大きな支援になっている。

また、この製品はvStorage APIs for Data Protectionと連携することで最初にフルバックアップを取った後は、増分バックアップのみで運用を継続できる。さらに、データ圧縮機能も有しているため、データ容量の伸長率は小さく、余裕を持ってストレージの増設計画を立てることが可能だという。

運用を始めて、ユーザに好評なのはファイル単位でのリストアだ。日々のPC利用で操作ミスによるファイルを削除してしまうというのはよくあることだが、そのような場合でも、同社では編成業務部に一報することでファイルをすぐに取り戻すことができるようになった。

北日本放送様の仮想環境バックアップ体制



「小さいことのようですが、マシン単位でしか戻せないとなると、まず全体を戻して、その中から目的のファイルを探して、と目的を果たすまでに時間がかなりかかってしまいます。ましてや、復活できなければ、ユーザは一からファイルを再作成しなければなりません。ファイル単位でリストアできるという機能は、私たちにとっても、ユーザにとっても、大きな労力削減を実現した機能。ユーザにも感謝されます」と、寺西氏は語る。

寺西氏によると、システム環境の仮想化は社内でシステム業務を完結して機敏に動きたい企業にこそ向いているテクノロジーだという。また、高度な機能までフルに使う必要はなく、8割ぐらい使えれば十分にその長所を享受できるという。この仮想環境への移行を後押しするのがCA ARCserve D2Dによるイメージバックアップで、簡単で低コストであるがゆえに対象とするサーバを絞らずに導入でき、結局それはシステム保護レベルを向上することになるようだ。

同社では今後、Arcserve D2DおよびArcserve Central Host-Based VM Backupでバックアップする対象拡大を構想している。すでに決定しているのは、2011年に導入した仮想デスクトップだ。PCの更新時期に関わらず最新のOS機能を利用したいという要望から導入され、現在約60台配布されている。この環境を保護するとともに、将来的には、Linuxサーバを始め、すべてのサーバを仮想化し、仮想化したサーバはArcserve D2Dでイメージバックアップする。このような包括運用管理の達成が、寺西氏の描いた情報システム運用の理想像だ。

ユーザ企業様プロフィール

北日本放送株式会社

富山県を放送対象地域とする放送局。略称はKNBで、テレビは日本テレビ系列、ラジオはJRNとNRNのクロスネットとなっている。局のキャラクターは「ゆっちゅ」と「めっぴ」。地上デジタル放送のウォーターマーク表示でも「ゆっちゅ」が使用されている。テレビ、ラジオともにドキュメンタリー分野に強く、日本民間放送連盟賞や芸術祭賞などで多くの優秀賞を受賞している。

■本社所在地／富山県富山市牛島町10番18号
■設立／1952年3月14　日
■資本金／2 億3,000　万円
■URL ／http://www.knb.ne.jp/

すべての製品名、サービス名、会社名およびロゴは、各社の商標、または登録商標です。
製品の仕様・性能は予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。
©2014 ArcserveUSA),LLC. and / or one of its subsidiaries. All Rights Reserved.

お問い合わせ

Arcserve Japan

お問い合わせ窓口：　ジャパン・ダイレクト　（0120-702-600 ）
※記載事項は変更になる場合がございます　2012年5月版

詳しくはWebで！ ARCserve.com/jp 検索

Printed in JAPAN